

[038] 九州ドイツ文学表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7391529>

出版情報：九州ドイツ文学. 38, 2024-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



編 集 後 記

『九州ドイツ文学』第38号をお届けします。

今号より編集長が田口に交代いたしました。小黑康正編集長、武田利勝編集長を始め、これまで『九州ドイツ文学』を支えてこられた皆様のご貢献を振り返ると、身の引き締まる思いがいたします。私自身、まさにこの学会誌に研究者としての基礎を鍛えていただきました。バトンをしっかりと握り、務めを果たしたく存じます。皆様、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、今号は論文3本、書評1本を掲載しております。大野奈美氏の論文は、九州大学大学院人文科学府に提出した修士論文を基に執筆されました。ムージル『合一』の二短編において、自我と身体、自我と時空間の関係が対照的に描かれていることを丁寧に確認した上で、両編ともに〈個人への帰還〉を示唆して終わる意味を検討しています。富重純子氏の論文は、「トランジット」を巡る3つの作品から、場と人間の相互規定が失われた現代の有様と、その模糊とした世界に「私」の立脚点を作り出す「見る」という行為を、印象深く浮かび上がらせています。一方、竹岡健一氏はナチス時代の通俗科学的著作の中に、イデオロギー的歪曲を指摘します。当時のドイツ人たちが、たとえ見え透いた虚偽でも喜んで受け入れたのは、外国に対する劣等感を打ち消すためでした。このように、3本の論文がいずれも自己を巡る不安というテーマを取り扱っている点は、偶然とは言え興味深いことです。

今、世界のあちこちで起きている苛烈な戦いも、同じ不安に起因しているように思われます。田野武夫氏による書評中の言葉を借りれば、人類はまだ「超越性と地上的個性」の繋がりを見いだせずに、むしろどちらを是とするかで争い続けています。

もしつねに人間が絶え間のない分割と分断の場である——と同時に結果でもある——とするならば、人間とはいったい何なのか。

(ジョルジョ・アガンベン『開かれ 人間と動物』、岡田温司・多賀健太郎訳、平凡社、2011年、37頁)

たしかに他者と外部を意識するときに、はじめて自己が成立するのでしょうか。動物的生からの離脱です。しかし、分ける行為が人間を人間たらしめているとするならば、連関としての世界を回復するというまったく正反対の試みは、いかに困難であることか。地上にボエジーを、と願わずにはいられません。

数多くの業務を抱えながらも、原稿を隅々まで精査してくださった原稿審査委員の皆様、一言一句に集中して作業を進めてくださった編集委員の皆様に感謝申し上げます。次号にもぜひ積極にご投稿くださいますよう、お願い申し上げます。

(田口武史)